

二〇一六年度 第二回入学試験問題

国語 (五十分)

この冊子さつしには、

文章一

文章二

の二つの文章があります。

## 文章一

緑の森の中を歩く「森林浴」は、たいへんに気持ちが良いものです。「森林浴」というのですから、森林で何かを浴びているはずで①。「森林の中で何を浴びて、気持ちがいいの  
だらうか」と考えてください。

小鳥の鳴き声がかたまるような「シーン」とした静けさでしょうか、あるいは、森をおおうように存在するしつとりとした湿り気②でしょうか。あるいは、森の樹々が光合成をして放出する酸素でしょうか。あるいは、「何かを浴びているというのは気のせい、特に、何かを浴びているわけではない」と思う人もいます。

じつは、森林浴で浴びているのは、樹々の葉っぱや幹から出ている、ほのかに感じる香り③なのです。森林浴では、マツやヒノキなどの樹々が出す香りを浴びています。樹々の香りを思いきり吸い込めば、身も心もリフレッシュするのです。

樹木は、葉っぱや幹から香りを放っています。これらの香りは、私たちの暮らしの中で、入浴剤や化粧品等に使われ

ています。そのおかげで、私たちは、心を癒され、心身ともにリフレッシュされ、安眠や食欲まで促される効果を享受しています。

「アロマセラピー」、あるいは、「アロマテラピー」という語があります。アロマは「芳香」のことです。「セラピー」や「テラピー」は、「治療」や「療法」を意味します。植物の花や葉の香りを嗅いで、気持ちを鎮静化させたり、ストレスを軽減したりして、心身の健康をはかる治療法です。①

ヒノキの葉っぱは、香り高いものです。この香りの殺菌効果はよく知られています。a、昔から、この効果を期待して、食品の新鮮さを保つために利用されています。魚屋さんやお寿司屋さんの店頭では、生魚の下にヒノキの葉っぱが敷かれていることがあります。一昔前には、秋になると多くの店で、マツタケが大切そうにこの上に載せられて売られていました。

ヒノキは、葉っぱだけでなく、幹や枝の材も香りが高く、その香りのおかげで、この材は細菌や虫に強いのです。ですから、生ものを載せるため細菌の繁殖を防がねばならない「X板」や、湿気が高く温かいので細菌が繁殖しやすいお風呂で使う「桶」や「椅子」などの木製品に使われて

います。

ヒノキの材は、虫に食べられたり腐食したりせず、長持ちしなければならぬ建物や建具、高級なタンスなどの家具にも使われます。奈良の法隆寺は、世界最古の木造建築であり、築後一〇〇〇年を超えていますが、<sup>②</sup>建築材料には、ヒノキが使われています。

ヒノキに含まれ、抗菌、殺菌作用をもつ「木の香り」と表現されるのは「ヒノキチオール」です。昔からいわれる「ヒノキ油」の成分です。このような植物の葉や幹から放出される香りは、「フィトンチッド」とよばれます。「フィトン」とは「植物」という意味で、「チッド」は「殺すもの」という意味のロシア語です。

2

<sup>③</sup>「フィトンチッド」は、植物たちがカビや病原菌を遠ざけたり退治したりするための香りです。「森林浴で浴びているのは、樹々の葉っぱや幹から出ている、ほのかに感じる香りなのです」と紹介しました。香りはほのかでも、その作用はかなりすごいものです。ほのかな香りが、カビや病原菌を遠ざけたり退治したりするはたらきをするのです。

私たちは暮らしの中で、この香りのはたらきを、防虫剤や防腐剤などに利用しています。

b

、柏餅や桜餅、柿

の葉寿司などは、植物の香りを利用して食べ物の保存をはかる例です。ササやタケの葉っぱは、チマキや笹団子、鱒寿司を包むのに使われます。昔は肉やおにぎりなどを包むのに、タケの皮が利用されていました。

近年は、肉やおにぎりを包むのに、タケの皮が使われることが少なくなりました。でも、<sup>④</sup>鱒寿司を包むのには、今でも、タケの皮が使われます。これは、自然の素材で包むことにより、鱒寿司に高級感をもたせる効果があることも一因でしょう。

でも、それだけではありません。サバは傷みやすいのです。そのため、昔から、漁で陸揚げされて並んでいるサバが何匹かを数えるときには、時間をかけずに、パッパッパと数えてきました。その結果、数はいい加減になります。だから、いい加減な数をいうときには、「**Y**」という表現が使われるのです。そんな傷みやすいサバが腐るのを遅らせるために、タケの皮が使われているのです。

3

「植物の香りが、ほんとうにそんな効果をもつのだろうか」と疑う人もいるでしょう。その効果は、実験で容易に確かめることができます。小さな容器に香りを発散する植物、たとえば、ヒノキの葉っぱや、市販されている植物の香り物質な

どをいれます。そして、大きい容器に、カビの生えやすいお餅のような食べ物を入れ、準備した小さい容器もいっしょに入れて密封<sup>みつほう</sup>します。香りがない場合、お餅にはすぐにカビが生えますが、香りがあると、カビはなかなか生えません。

フイトンチッドは、このように、カビや細菌を殺したり、繁殖<sup>おそ</sup>を抑えたりします。それだけでなく、もつと強く、植物のタネの発芽を抑える効果も示します。密閉できる容器を二つ用意し、どちらにもレタスのタネとそれが発芽するように水<sup>あ</sup>を与えた小さなお皿を入れます。いっぽうの容器内には、<sup>⑤</sup>クスノキの葉っぱをすりつぶしたものを入れたお皿を置きます。その後、二つの容器を密封し、光の当たらない温かい場所に置いてください。

香りがいい容器の中のタネは、翌日には発芽し、成長をはじめます。c、クスノキの葉っぱをすりつぶしたものを置いた容器内のタネは、何日経<sup>た</sup>っても発芽しません。クスノキの葉っぱの強い香りが、レタスのタネの発芽を抑えるのです。

クスノキの葉っぱは、防虫剤に使われる「シヨウノウ（樟脳）」という強い香りを含んでいます。木についている葉っぱはほとんど香りませんが、虫がかじって傷をつけると、そ

の香りが発散してきます。虫を追い払<sup>はら</sup>うための香りです。だから、実験のときには、すりつぶしたり、細かく切り刻んだりしておきます。

4

（田中修『植物はすごい』中央公論新社より）

## 文章二

A

「おーい、健たける」

その日、練習を終えて家に帰る途中、うしろから声がした。ふりかえった先にいたのは、達也さんだった。

「こんにちは」

おれは帽子ぼうしをとってあいさつをした。

達也さんは、兄ちゃんの同級生で、同じクラブチームの仲間だ。<sup>①</sup>ふたりは少年野球のころからの友達で、中学生になつてからは、学校の野球部には入らず、クラブチームに所属している。学校の野球部とクラブチームは、軟式なんしきと硬式こうしきの違いちがだけではなく、レベルが全然違うのだそうだ。クラブチームには、市内だけでなく、わざわざ遠くから、親に送り迎えむかをしてもらつて通ってくる部員もいる。

「真太郎の調子はどうだった？」

達也さんは、少し眉まゆを寄せた。達也さんは毎日見舞みまいに来てくれているが、今日からは来られない。

「これから出発ですね。ゴールデン杯はい」

達也さんの大きな荷物を見て、おれはたしかめた。明日から、<sup>②</sup>兄ちゃんが照準を合わせて練習をしてきた大事な大会がはじまるのだ。

「兄ちゃんの調子は、いいです」

胸につまるものを感じながら、おれは答えた。ゴールデン杯は、兄ちゃんにとって、大きな意味を持つことをよく知っていたからだ。この大会で、関係者の目にとまり、野球の名門校に進む選手もいれば、プロのスカウトマンに認められる選手もいる。

「そうか。よかった」

おれの返事に、達也さんは強こわばらせていたほおを少しゆるめた。

弟のおれから見ても、兄ちゃんと達也さんのきずなは深い。同じ投手として、気持ちが変わりあえるのだろう。バッテリーを組む投手と、捕手ほしゅの関係が強いのは当たり前だが、同じポジションでないと、わからない思いがあるのだと、兄ちゃんも言っている。先発と控ひかえ、たとえ立場は違つても、だ。

少年野球のころから、兄ちゃんは先発ピッチャー、達也さんは、控えのピッチャーだった。控えといつても三番手くら

いの投手で、じっさいに試合で投げることはほとんどなかった。

「あんなことになるなんてな」

達也さんが悔くやしそうな顔をする。大事な試合を前に、親友の身をおそったアクシデントが、自分のことのようにショックだったみたいだ。

③ 兄ちゃんがけがをしたのは、試合のスタメンが発表される日だった。

かんとくから先発を告げられたあと、ロッカールームに引きあげかけたとき、入り口の段差で転んだのだ。たまたま床ゆかがぬれていたらしく、ふみ出した足がすべってしまったという。とっさに利きき手の左うでをかばったのは、ピッチャーとしての意識の高さだろう。さすがだ。

④ さらに達也さんといっしょだったのが、幸運だった。

「大丈夫、大丈夫」

と、強がってロッカールームに入ろうとする兄ちゃんを制して、達也さんがコーチを呼び、病院に付きそってくれたからだ。

診断しんだんは右うでの骨折だった。ギプスで固定するだけでも治るが、その場合は多少の変形が残るかもしれないとのこと

だった。形が変わると機能にも影響えんきょうがないとは言えない。幸い利き手ではなかったが、それでも大事なうでだ。お医者さんと家族、それにコーチと話し合った結果、手術をするこ  
とになった。

その程度ですんだのは、達也さんのおかげだと思う。達也さんが兄ちゃんの言うままにして、助けを呼ばなかったら、骨は変形してしまい、手術でもどすのが難しかったかもしれない、お医者さんからきいた。がまん強い兄ちゃんだから、危なかった。

「あのときはありがとうございます」

だからあらためてお礼を言うと、

「いやいや、そんな」

達也さんは照れた。

「じゃあな」

「大会、がんばってくださいね」

声をかけると、行きすぎようとした達也さんが立ち止まった。そして意味のわからないことを言った。

「ああ。真太郎に伝えてくれ。おまえの分まで一生懸命いっしょうけんめい投なげるからって」

「あ、はい」

いぶかしく思いながらも、おれはひとまずうなずいた。達也さんの目が、あんまり真剣しんけんだったから。

**B**

達也さんの言った意味がわかったのは、家に帰ってからだった。夕飯のとき、母さんが教えてくれたのだ。

「初戦は達也くんでいくんだって。真太郎の分までがんばってほしいわね」

母さんの話に、カレースプーンを持つ手が止まった。心臓がざわりと音をたてる。

「兄ちゃんは知ってるの？」

「うん。メールでいろいろ相談にのってたみたいよ」  
やっぱりな。

このごろ兄ちゃんがいらついていたわけが、わかった気がした。達也さんが自分のかわりに投げるのが、気に入らないんだらう。だって達也さんは、二軍だから。

おれにはそれがよくわかる。

「健もお兄ちゃんにいろいろきいてみたら？ つぎは先発でしょ」

「う、ん」

島田くんの顔が浮うかんで、口の中のカレーが、苦くなった

ような気がした。

先週、つぎの試合のスタメンが発表された。おれは目を疑った。先発投手のらんに、自分の名前があったからだ。そこには、六年生の島田くんの名前があるのが普通ふつうだったから、おれは思わず顔を見てしまった。島田くんは、真っ赤になっていた。

たしかにこのところ、島田くんはスランプらしい。打たれるし、打てない。でも、だからと言って、これはないだらう。<sup>⑥</sup>おれは首をひねった。だっておれは二軍だ。

「このごろ、健は調子がいいからな。ちよつとやってみる」  
かんとくの言い方は軽かったが、おれには、返事ができなかった。島田くんがこつちをにらんでいるような気がしたからだ。

島田くんは、おれなんか先発をやるのが悔しかったのだと思う。当たり前だ。実力がぜんぜん違う。おれは、公式戦で投げたこともないのだ。

「は、はい」

やっとかえした返事は、思った以上にかすれていて、おれはますますいごちが悪かった。

C

つぎの日、病院に行くと、ベッドは **X** だった。兄ちゃんは、リハビリに行っているらしい。

キャビネットの上の色紙を手にとった。昨日きちんと立てかけたのに、またふせられていた。

「治ったら、160キロが投げられるぞ」

「がんばれ第二のダルビッシュ」

「甲子園、日本のプロは当たり前、めざせ大リーグ」

兄ちゃんへのメッセージがびっちり書いてある。クラブのチームメイトからのお見舞いだ。

兄ちゃんは、この色紙をどんな気持ちでふせたのだろうか。

悔しかったのだろうか。それで、もう見たくないのだろうか。

か。島田くんも同じ気持ちなのだろうか。

試合のスタメンが発表されてから、島田くんはおれのことを見ない。あいさつをしてもシカトされるから、思いこみじゃないだろう。

きっと、おれになんか任せられないと思っているんだ。昨日も、おれのコントロールはさんさんだったから。連打を浴びた上に、何人にも盗塁されて、大量点をとられた。

「そんなんじや、今度の試合、負けるぞ」

練習中、きこえてきたやじの中に、いらだったような島田くんの声も交じっていた。

色紙を元のようにふせたとき、

「健、また来てたのか」

兄ちゃんの声が出た。リハビリを終えて帰ってきたようだ。

「家でも、自主練くらいできるだろう」

家の庭には、古タイヤがつるしてあるし、壁にマットもはつてある。バッティングも投球練習もいつでもできるから、兄ちゃんは不服そうだ。

「つぎの試合は、投げるんだろう」

「……、自信がない」

おれは、兄ちゃんから目をそらした。

「本当は **a** なんかより、**b** が投げた方がいいんだ」

ぼそつと続けるおれに、兄ちゃんはさすとすように言った。

「**c** の気持ちを考えてみろよ」

「考えなくてもわかるよ」

おれは言葉をはき捨てた。

「きっと **d** は、おれみたいなへぼがかわりをつとめる

のがいやなんだ。**e** だってそうなんだろう？」

まずいと思ったけれど、言葉はすでに出てしまっていた。

「おれがつてなんだよ？」

兄ちゃんがつかつかってきたので、ついむきになって、声を荒げた。

「だって、自分のかわりを達也さんがやるのが不満なんだろ。自分より実力がないやつが、かわりをやるのなんて、面白くないもんな。それでいらついでるくせに」

顔がかつと熱くなる。兄ちゃんの顔も、またたく間に赤くなった。

(まはら三桃『なみだの穴』小峰書店より)



